

(抄録)

研究課題名：アジア英語の意味特徴の解明に向けて—フィリピン英語とネパール英語の語彙の背後にあるメカニズムについて

研究代表者名：山口和之

現在、世界で 20 億の人々が英語をコミュニケーションの道具として使用していると言われ（吉川 2016:1）、英語を母語とする人の数はどの言語よりも多い（Crystal 2003: 2）。アジアも例外ではなく、言語の異なる者同士がコミュニケーションを図るための道具となりつつある。しかしながら、ここに大きな問題が生じる。アジアを含めた英語を母語としない国で使用される英語は、英米語のような母語話者の英語とは異なる英語変種である。そのため同じ英語でありながら、異なる英語変種話者間で相互理解に障がいが生じる。本研究の目的は、①アジア英語の語彙の背後にあるメカニズムの理解を深めることにより、当該話者間のミスコミュニケーションを減らすこと、②また上記から生じるアジア英語への偏見をなくすことにある。本目的のため、アジア英語の中でもネパール英語およびフィリピン英語特有の語彙の背後にある仕組みの解明を目指す。2 つの変種特有の表現・語彙の収集から本研究は出発する。そしてネパール英語収集はフィールドワークを中心に行い、フィリピン英語は文献を中心に収集した。ネパール英語特有の特徴、つまり母語としての米語、英語と異なる特徴は、ネパール英語だけではなく、南アジアで使用される英語変種にみられる特徴であり、南アジアで使用される母語（インド諸語）の影響がそこでの英語変種に色濃く反映されている、と主張する。例えば、冠詞の使用に関して、米語や英語と異なる使用に関しては、インド諸語には冠詞がなく、そのため「適切に」使用できない、と主張することができる。同様の説明が、複数形の使用、前置詞の使用についても言える。フィリピン英語に関しては、認知意味論的アプローチに立ち当該英語の語彙特徴を明らかにした。多くの先行研究の知見に立ち、プロトタイプを中心とした意味ネットワークモデルを想定し、プロトタイプから周辺的意味に時間の経過と共に派生する、と考えた。派生メカニズムとしては、「メタファー」「メトニミー」そして「シネクドキー」とし（Lakoff and Johnson 1980, 1999:14）、フィリピン英語の語彙分析を行った。